

『中央学術研究所紀要』第44号抜刷
平成27年11月15日発行

宗教団体における環境保全の取り組み

町 田 勝

宗教団体における環境保全の取り組み

町 田 勝

1. はじめに
2. 環境保全に取り組んでいる宗教団体
 - 2.1 公益財団法人日本宗教連盟（日宗連）の協賛団体
 - (1) 宗教法人神社本庁
 - (2) 教派神道連合会（教派連）
 - (3) 日本キリスト教連合会
 - (4) 公益財団法人全日本仏教会
 - (5) 公益財団法人新日本宗教団体連合会（新宗連）
 - 2.2 その他の宗教団体
3. 環境マネジメントシステム（EMS）ISO14001の取り組み
 - 3.1 生長の家
 - 3.2 立正佼成会
4. まとめ

1. はじめに

今年、戦後70年を迎えた。日本の戦後の経済復興は、昭和25（1950）年の朝鮮戦争の特需からで、その後の「神武景気」「岩戸景気」「オリンピック景気」、続く「いざなぎ景気」の昭和45（1970）年までの20年間の長い好景気が続いた。その間、企業が生産活動をひたむきに進める一方、環境への配慮を欠くことになり「イタイイタイ病」「水俣病」「四日市喘息」「新潟水俣病」の「四大公害病」を経験することになった。そして、昭和42（1967）年の『公害対策基本法』の施行、昭和45（1970）年の「公害国会」で公害関係14法案が制定、昭和46（1971）年に環境庁（現 環境省）が誕生し、やっと日本における公害行政、公害の克服に向けた取り組みがスタートした。

『公害対策基本法』の施行後、加害者と被害者が分かりやすい公害問題への対策が進み、1980年代までに公害問題も改善されてきた。この公害が改善される過程で、宗教者の取り組みについての記録がほとんどない状態であった。なお、数少ない記録の中

で、公害が原因で亡くなられた方々の集団慰霊が報告されている。公害問題の改善が進む一方、複雑化・地球規模化する環境問題がクローズアップされるようになってきた。これら環境問題の対応のため、平成5（1993）年に『環境基本法』が施行され、公害対策から地球規模の環境問題の取り組みへと変化し現在に至っている⁽¹⁾⁽²⁾。

さて、宗教団体の多くが世界の平和を目指した活動に、積極的に取り組んでいるものと推察される。現在、世界の平和をおびやかすものとして、地球環境変遷史学の濱田によると、特に重要な4つの課題が示めされ対応が求められている。その課題とは、①核戦争再発への危惧、②民族・宗教間対立の激化、③エイズなどの悪性感染性疾患の急増、④地球環境の悪化と対策の遅れである⁽³⁾。

その中の一つである「地球環境の悪化と対策の遅れ」の大きな要因として、人びとの飽くなきアメニティー（快適な環境）の追求が上げられている。このアメニティーの追求は、もっとももっととの人びとの欲望に起因しているものといえる。この欲望の抑制には、「もったいない」「少欲知足」などの食料や資源を大切にすることを説き、布教活動や実生活で簡素な生き方を実践している宗教団体の役割、宗教団体への世間からの期待が大きいものと思われる。そこで、宗教団体が実践している環境保全の取り組みについて次章で紹介する。

2. 環境保全に取り組んでいる宗教団体

日本国内の宗教団体の集まりとして公益財団法人日本宗教連盟（日宗連）があり、協賛団体である宗教法人神社本庁、教派神道連合会、日本キリスト教連合会、公益財団法人全日本仏教会、公益財団法人新日本宗教団体連合会の5団体が緊密な提携による協力と関係諸団体との連携により事業を行っている⁽⁴⁾。これらの協賛団体の中の宗教団体について、ホームページを中心に環境保全の取り組みを調べた。また、日宗連の協賛団体以外でも多くの宗教団体が存在しているため、信者数の多い宗教団体についてもホームページを中心に環境保全の取り組みを調べたので、その内容を紹介する。

2.1 公益財団法人日本宗教連盟（日宗連）の協賛団体

(1) 宗教法人神社本庁

「神道への誘い」で環境保全との関わりについて、日常生活のいたるところで神道の行事が行われ、鎮守の森に代表される自然を守り、自然と人間とがともに生きてゆくこと、自然との共生が行われていることなど、次のように要約できる。

神道は、日本人の暮らしの中から生まれた信仰といえ、遠い昔、私たちの祖先は、稲作をはじめとした農耕や漁撈などを通じて、自然との関わりの中で生活を営んできた。自然の力は、人間に恵みを与える一方、猛威もふるった。人びとは、そんな自然

現象に神々の働きを感知し、自然の中で連綿と続く生命の尊さを実感し、あらゆるものを生み出す生命力も神々の働きとして捉えた。そして、清浄な山や岩、木や滝などの自然物を神宿るものとしてまつり、やがて、まつりの場所には建物が建てられ、神社が誕生した。神道の神々は、海の神、山の神、風の神のような自然物や自然現象を司る神々、衣食住や生業を司る神々、国土開拓の神々などで、その数の多さから八百万の神々といわれている。

神道の信仰が形となったものが祭りで、稲作を中心に暮らしを営んできた日本の姿を反映し、春には豊作を、夏には風雨の害が少ないことを祈り、秋には収穫を感謝するものなどがあり、地域をあげて行われている。神道は、日本の民族宗教といわれ、日本人の暮らしにとけ込んでおり、初詣や厄除、初宮参りや七五三、結婚式や地鎮祭など、神道の行事は日常生活のいたるところで見かける。神道のもつ理念には、古代から培われてきた日本人の叡智や価値観が生きている。それは、鎮守の森に代表される自然を守り、自然と人間とがともに生きてゆくこと、祭りを通じて地域社会の和を保ち、一体感を高めてゆくこと、子孫の繁栄を願い、家庭から地域、さらには皇室をいただく日本という国の限らない発展を祈ることなど。また、神道には、神々をまつる環境として、清浄を尊ぶという特徴があり、神社は常に清らかさが保たれ、祭りに参加する人たちは必ず心身を清めるなど、日本人の生き方に深く影響しているといえるでしょう⁽⁶⁾、と述べられている。

このように、日常生活のいたるところで神道の行事が行われており、その例として、富山県神社庁では「田んぼ学校」御田植え祭が実施されている⁽⁶⁾。また、鎮守の森に代表される自然を守り、自然と人間とがともに生きてゆく例として、鹿児島県神社庁の蒲生八幡神社境内の大クスが、昭和63（1988）年度の環境庁の巨樹巨木調査で日本一の巨木と認定され、その後国特別天然記念物となっている⁽⁷⁾。

(2) 教派神道連合会（教派連）

教派連では、1995年11月に開催された結成百周年記念シンポジウムの第三分科会で、環境をテーマとして取り上げ報告しており、要約すると次のようになる。

環境と人間を考えると、人間は生きるためにいつでも環境をいじくってきた、操作してきたといえる。ある意味で、人間は環境を破壊しなければ生きていけない存在であることを、分科会でまず確認した。分科会では、各教団で取り組んでいる身近な問題について話し合った。たとえば富士のお山の植物の生態系がここ数十年で随分変わり、住んでいる動物たちの生態が変わってきた。あるいは、日本の風景には松が必要欠くべからざるものとしてあるが、その松枯れがひどく松の生命力が弱っている。出てきた結論が二点であり、生態系の破壊ということ、自然の循環のリズムの破壊ということに集約できる。そして、分科会で話し合われた7点は次の通りである。

- ①シンポジウムで話し合われたことを各教団が持ち帰り、警鐘を鳴らす。
- ②環境問題に対する運動・活動が進められており、情報交換の場を設ける必要がある。
- ③環境問題に取り組む場合の根底に、地球は生き物であるという共通認識を置き、少なくとも地球を一つの生命体として考えて、活動の情報交換を行う。
- ④天地自然への畏敬の念を忘れない、そして感謝の心を大切にし、そして更に、人間の欲望によっていのちを奪われたものを慰霊する。
- ⑤畏敬の念、感謝の心、慰霊の営み、と同時に、赦うことも忘れてはならない。赦うとは、いわゆる不浄や汚れを赦うことではなく、欲望の心を赦うこと。
- ⑥寛容の精神によって、共存・共生の思想を教義的に深める。
- ⑦教祖・開祖への回帰ということ。それぞれの教祖・開祖は、多くの艱難を乗り越えて一教を立て、多くの人びとを救いながら時代社会を鋭くえぐる文明批判をすると同時に、人間の生き方をえぐる民衆批判をしたわけである。これは自己批判といってもいいわけであり、今日、私たちはそういう精神も忘れてはならない⁸⁾。

加盟する教派の出雲大社教では、「自然豊かな当社境内にて野鳥観察を楽しんで頂けるよう、探鳥パンフレット『野鳥と憩う鎮守の杜』を製作いたしました。境内にて観察できる野鳥の種類・時期・場所などを写真やマップを添えて紹介⁹⁾されている。

大本では、「天地のご恩」に報いるために、火・水・土・空気のご恩に感謝し、日々の生活を省みるとともに、自然の摂理にしたがう天然力・自然力による「愛善エネルギー」を開発・利用する活動をすすめている¹⁰⁾。昭和46（1971）年、三代教主は「高度経済成長が深刻な公害をもたらし、環境問題に取り組まなければ日本も世界も大変なことになる」と説いた。昭和56（1981）年に、三代教主の指導により、愛善みずほ会（1948年設立、現一般社団法人）は体制を刷新して、お土作りを主体に、無・減農薬による「みずほ農法」の普及に努めた。五代教主は、天恩郷内の畑で「愛善酵素農法」により野菜作りをし、天産物自給の型を自ら実践している。愛善みずほ会は、天産物自給自足による国民皆農をうたい、「愛善酵素農法」をすすめ、土づくりによる農業生産の向上、農産物の品質・安全の向上強化をはかり、天産物自給経済の原則にもとづく正しい食・農・環境のあり方を実践、普及、啓蒙を行っている¹¹⁾。

扶桑教では、富士道・富士講の本来の姿は、歴史的な資料としてのみではなく、民衆の中に生きる姿である。西欧の登山は、いわばスポーツとしての自然の克服であり、頂上に立つことが目的であるが、富士講の精神は、厳しい富士の自然と一体化し、あるがままの環境を受け入れて「生かされている自己を再確認する」ことを目的とした。このことは、最近提唱されている「自然との共生」という理念に近いものであると認識している。富士信仰として培われた長い歴史と、山全体を霊場として一木一草を大切に守り、山の厳しい自然を畏敬の念を持って祈った先人の思いを後世に伝え、460年以上脈々と引き継がれてきた先人・先達の想いを今一度思い起こし、尚一層の精進努

力を重ねている¹²⁾。

(3) 日本キリスト教連合会

キャンプなどによる自然との関わりが多く、加盟団体の日本聖公会の清里のキープ協会では、自然とのふれあいを通して環境教育・国際協力に取り組んでいる¹³⁾。また、浜田山キリスト教会では、地域のボウイスクウトと協力して自然とふれあうキャンプを実施している¹⁴⁾。

(4) 公益財団法人全日本仏教会

全日本仏教会では、事業が時代に即応した内容となるための精査と検証の場として、当財団を構成している加盟団体による宗派代議員会議と都道府県仏教会・仏教団体代議員会議を設置し、定期的に会議を開催している。加えて、社会問題や人権問題、環境問題、国際交流の課題等々について、調査・研究・提言等を検討する専門委員会等の機関を設置し、公益目的事業計画等に反映するための活動を進めている¹⁵⁾。

加盟団体の天台宗では「一隅を照らす運動」¹⁶⁾が行われている。この運動は、信仰と実践によって一人ひとりが心豊かな人間になり、平和で明るい世の中を共に築いていこうという社会啓発運動で、「一隅を照らす、これすなわち国宝なり」という、天台宗を開かれた伝教大師最澄（767～822年）の精神を現代に生かすために生まれた。一隅（いちぐう）とは、今、あなたがいる、その場所で、あなたが、あなたの置かれている場所や立場で、ベストを尽くし照らすことで、あなたが光れば、あなたのお隣も光り、町や社会が光り、小さな光が集まって、日本を、世界を、やがて地球を照らすことになる。あなたの一隅から世界を照らし、一人ひとりが輝きあい、手をつなぐことができれば、みんなが幸せになり、素晴らしい世界が生まれる運動である。

この「一隅を照らす運動」には「実践三つの柱」として「生命・奉仕・共生」があり、具体的な活動として地球救援事業としての緊急支援、国内支援、海外支援、海外学校建設支援に加えて、地球環境保全活動が行われている。「共生－自然の恵みに感謝しよう」では、「MOTTAINAI（もったいない）」¹⁷⁾のキーワードで「地球環境保全」というと、あまりに大きなことで、自分が関わることだろうかと思ってしまう「大切なことはわかるけれど、面倒なことはしたくない」と思う方もおられるでしょう。「もったいない」日本人でさえ忘れかけているようなこの言葉を、もう一度私たちの意識に呼び覚ますことで、環境問題やゴミ問題などにごく自然に関わっていくことができるのではないのでしょうか、と述べられている。

高野山真言宗総本山金剛峯寺では、山林部の経営理念「私たちは、先徳が育成し遺されてきた高野の森林を守り、次世代へ引き継ぎます。広い視野で物事を見て、一つの輪になり一歩ずつ仕事に取り組みます。森林からもたらされる豊かな心が、多くの

人びとにひろがることを願います。」で、森づくりを通して豊かな心を一人でも多くの人びとへ広げていくことを使命とし、森林を守り次世代に引き継ぐ努力をしている⁹⁸。

浄土真宗本願寺派では「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）を推進しており、重点プロジェクト基本計画2012～2014年度で「エネルギーやものを大切にすることを学ぶ」「自然環境を守ることを学ぶ」を実践目標の例として取り上げている⁹⁹。

曹洞宗では、地球環境をまもり自然とともに生きていく「グリーン・プラン」運動を展開している。「この世に存在するものは、すべて支え合い、助け合って生かされている」という精神を忘れず、「環境保全を進める人びとの心を支える教化の展開」を環境問題に取り組む意義として、環境破壊は人間の日常生活の中から生まれて来るものであるため、毎日の生き方の上でどのようにものを大切にすると環境を守る生活が送れるのか、という生活実践の輪をひろげることを環境運動の中心課題としている。具体的な例では、省エネルギーへの取り組みとして、徹底した節電の実践、冷暖房の設定温度の見直し、緑化の推進、ソーラーパネルなど発電装置の導入、LED照明への切り替えを推進している⁹⁹。

日蓮宗では「全国てらこや活動」¹⁰⁰の一環で、人・自然・社会と密接な関係性の中にある宗教として、環境と宗教の関係を探究する学問の「環境宗教学」の講演会開催、「あんのん基金」¹⁰¹による戦争、天災、貧困、環境などの諸問題に支援している。

(5) 公益財団法人新日本宗教団体連合会（新宗連）

新宗連の環境保全の取り組みは1991年から行われており、植林・植樹、水質保全、ゴミの減量、清掃を含め、全国の協議会単位で特色ある活動を現在も展開している。特に、二酸化炭素の削減などを進めるため「電力ダイエット運動」^{102 103}を2004年から2回にわたって実践している。2004年1～3月の冬季に実施された第1次電力ダイエット運動では、28,902世帯（調査記録紙45,000枚配布29,357枚回収し有効28,902枚）が参加し132万kWhの電力（二酸化炭素475トンに相当）を削減した。また、2005年7～9月の夏季に実施された第2次電力ダイエット運動では、43,573世帯（調査記録紙59,600枚配布44,266枚回収し有効43,573枚）が参加し188万 kWh の電力（二酸化炭素675トンに相当）を削減した。こうした実践が新宗連の加盟教団の各家庭に広がることで、ライフスタイルの変化と創造を目指そうとしている。

新宗連の加盟教団では平和活動への取り組みが行われ、「電力ダイエット運動」への参加に加えて、真生会では「地球感謝の日」制定活動参加¹⁰⁴、妙道会教団ではネパール山岳エコロジースクール参加¹⁰⁵などの環境保全の取り組みが行われている。

立正佼成会では、地球環境保全のためのさまざまな活動に取り組んでいる。ただし、特別な活動を行っているわけではなく、宗教心にもとづく生活実践こそ環境に感謝する生き方と認識し、日々、仏教の生活化に努めており、ひと言で表せば“信仰即エコ

ライフ”として活動に取り組んでいる。便利で快適なライフスタイルに慣れてしまい、地球環境が危機状況にあると頭ではわかっている、身についた習慣を変えるのはなかなかむずかしいものと捉えている。そして、教団本部（教庁）では、「環境方針」を2009年6月に会の内外に宣言し、環境マネジメントシステム（EMS：Environmental Management System）の国際標準規格である ISO14001の認証を2010年2月15日に取得し、KGDI（K：紙の削減、G：ごみの減量、D：電力の節減〔節電〕、I：「一食を捧げる運動」の実践）の取り組みなど、成り行きに任せず、みずからを律し、明確な意識をもって活動に取り組んでいる⁸⁰。これら、立正佼成会の環境保全の取り組みについては、具体的な内容を宗教団体のEMSの取り組みとして次章で紹介する。

2.2 その他の宗教団体

日宗連の協賛団体以外にも多くの宗教団体が存在するため、週刊ダイヤモンド「全宗教法人信者数ランキング」⁸¹に掲載されている信者数が多い50団体の中で、環境保全の取り組みがホームページに公開されている団体の活動の内容を次に示す。

真如苑では、林業の衰退とともに放置された青梅の山林を入手し、「青梅の杜」⁸²として間伐などの手入れを行い、人とともに生きる“里山”を復活・維持し、持続可能な形で管理を行っている。この山林での木々を育て、人の役に立つ加工を行い、また次の木々をはぐくむサイクルが認められた。そして、FSC（Forest Stewardship Council 森林管理協議会）により、森林管理が環境に配慮し社会的利益にかない継続的な経営が可能な森林としてFSC・FM（Forest Management）認証を取得し、製造・加工・流通過程におけるFSC・CoC（Chain of Custody）認証も取得している。さらに、東京・広尾にある東京本部の庭園にはヒキガエルが生息し、庭園内の池は産卵をするための貴重な繁殖場所となっており、生息するヒキガエルを保護するとともに、カエルを通して環境を考える「子供カエル教室」⁸³を、東京本部建替工事の委託会社の協力を得て開催した。

神慈秀明会では、2003年5月1日に「秀明自然農法」の普及のため、特定非営利活動法人秀明自然農法ネットワーク（略称SNN）を設立した。そして、普及活動、環境の保全、国際協力、社会教育、子どもの健全育成を図る活動を推進し、生産・流通消費の提携、マイ田んぼ、家庭菜園、食育、マルシェなどの活動を行っている^{84 85}。

崇教真光では「陽光農法」により、農薬のために枯れて作物のとれなくなった土地を、自然でおいしい作物のできる、健康な大地へと甦らせている⁸⁶。

生長の家では、2000（平成12）年度の生長の家運動方針において、環境マネジメントシステム（EMS）ISO14001の導入が打ち出され、「生長の家環境方針」が定められた。これに基づいて2事業所（本部事務所・総本山）が導入に向けた取り組みを開始し、翌年の2001年7月19日に宗教法人として日本で初めて認証取得した。翌年度から

毎年、事業所を拡大し、7年目の2007年7月19日で、全国66事業所（関係団体の2ヵ所を含む）全てが認証取得を完了した。そして、これらの66事業所はそれぞれ独自性を活かしながら更なる環境保全の取り組みを積極的に展開している。具体的には、炭素ゼロ運動、環境家計簿「生活の記録表」の記入などが行われている⁶⁴。これら、生長の家の環境保全の取り組みについては、具体的な内容を宗教団体のEMSの取り組みとして次章で紹介する。

世界救世教いづのめ教団では、関連団体であるEM研究所（静岡市）において、環境浄化資材であるEM（Effective Microorganisms：有用微生物群・比嘉照夫琉球大学名誉教授が開発）の製造を行っている。EMは自然農法による稲や野菜、果樹の栽培・畜産をはじめ、生ごみ堆肥化、河川・池・海・砂浜の浄化、学校のプール清掃などに幅広く使用されている^{65,66}。

創価学会では、国連による「持続可能な開発のための教育の10年」（ESD）の制定を提唱。それが国連で採択され、2005年からスタートした。そのESDを支援する目的で、地球環境の改善に向けた、市民の意識改革を促す展示として2006年9月より「21世紀環境展」を全国で開催している。地球環境問題の真の解決のためには、国際社会や国家レベルの対策にとどまらず、一人ひとりが自分の問題として受け止める「心の変革」が不可欠であると呼びかける内容である。その他「変革の種子——地球憲章と人間の可能性」展、環境をテーマとした講演会、映画「静かなる革命」の作成などである⁶⁷。

天理教では「ひのきしん」（日々常々、何事につけ、親神の恵を切に身に感じる時、感謝の喜びは、自らその態度や行為にあらわれる。これを、ひのきしんと教えられる。天理教教典第8章⁶⁸）の一つとして「緑化ひのきしん」⁶⁹が行われ、天理教の自然観や「動植物の生態系」「生き物がはたしている役割や働き」を通して、親神様のふところ住まいを学ぶ。実習では、ガーデニングや、草木の剪定などを行い、経験豊富な専門家を講師に、実習を通して「緑化ひのきしん」に必要な知識、方法、手段を学ぶ。

中山身語正宗では、環境破壊や環境汚染による地球温暖化など、環境問題が日に日に深刻さを増しているため、環境保全の取り組みとして、国内外で緑化推進事業を展開しているNPO法人「地球の緑を育てる会」の活動を支援している。また「身の布施」行として、感謝運動実践会員による中国での植林活動にも取り組んでいる⁷⁰。

霊友会では、環境保全の取り組みの一環として、2009年6月23日に環境マネジメントシステム（EMS）ISO14001の認証を取得している⁷¹。

3. 環境マネジメントシステム（EMS）ISO14001の取り組み

前章で日宗連の協賛団体、その他の宗教団体の環境保全の取り組みについて紹介し

た。その中で、国際規格である環境マネジメントシステム（EMS）ISO14001の認証を取得している三つの団体が確認された。その三つの団体とは生長の家（教化・布教活動、祭典・祭祀、出版・広報活動、オフィス業務、66事業所、審査機関：BL-QE）⁴²及び立正佼成会（仏教「積尊が悟った真理・法」の布教、14事業所、審査機関：BSI-J）⁴³並びに霊友会（宗教活動、2事業所、審査機関：JET）⁴⁴であり、EMSの取り組みについてホームページで公開されている生長の家と立正佼成会の具体的な取り組みを紹介する。

なお、EMSのポイントは法的要求事項、その他の要求事項にどのように対応するかであり、時代のニーズや社会のニーズに応えながら、企業や団体の体質を整え強くしていけるかであると筆者は考える。このことは、時代のニーズ「諸行無常」、社会のニーズ「諸法無我」に合わせることである。それは、宗教が説いている真理に通じるものと思われるため、EMSの取り組みに関連する教えや法話も紹介する。

3.1 生長の家

生長の家の教えの主な特長は「唯神実相（ゆいしんじっそう）」「唯心所現（ゆいしんしょげん）」「万教帰一（ばんきょうきいつ）」の三つの言葉で表わされている。「唯神実相」の「実相」とは本当にある世界のことであり、唯一にして絶対の神がつくられた世界のこと。「唯心所現」とは、この現象世界は人間の心によって作り出している世界であるという教えを表現している。「万教帰一」とは、万（よろず）の教えを一つ（生長の家）にするという意味ではなく、これは後ろから読んで、一つの教えが万の教えとして展開していると説いている⁴⁵。これらの教えはEMSの取り組みにも密接に関係していると思われる。

EMSの取り組みは、2000（平成12）年度から本格的に地球環境保全活動を開始し、2001年7月19日に宗教法人として日本で初めてISO14001の認証を取得した。

(1) 環境方針

生長の家が2001年に取得したEMSの認証適用範囲は「教化・布教活動、祭典・祭祀、出版・広報活動、オフィス業務」である。登録範囲は66事業所で、64事業所が「教化・布教活動、祭典・祭祀、出版・広報活動、オフィス業務」、関係団体の2事業所が「出版・広報活動、オフィス業務」となっており、審査機関の一般財団法人ベターリビングシステム審査登録センター（BL-QE）の認証を受けている。また、ブラジル、アメリカ、台湾の海外拠点でもEMSの認証を取得している。

環境方針の基本認識は次頁に示す通りであり、昭和5（1930）年の立教以来の“天地の万物に感謝せよ”との教えを広く伝え、現代的な意味での宗教生活の実践として環境問題に取り組み、あらゆるメディアと活動を通して地球環境保全に貢献し、未来

に“美しい地球”を残さんとするとなっている。

紹介を割愛した行動指針では、布教活動を通じて、多くの人びとに自然と人間の一体感を醸成し、地球環境問題の改善に貢献する生き方を奨励する。布教や事業活動を展開する中で、自然生態系への影響に配慮し、太陽光発電装置の設置、植樹、低公害車の導入に積極的に取り組む。また、「あらゆる物に感謝する」という心の実践、資源やエネルギーも神・仏の現れであるとの考えに立ち、「自制」「自己訓練」によってむやみに資源やエネルギーを消費しないように努めるなどとなっている。

生長の家環境方針

基本認識

地球環境問題は、その影響が地球規模の広がりを持つとともに、次世代以降にも及ぶ深刻な問題である。今日、吾々人類に必要とされるものは、大自然の恩恵に感謝し、山も川も草も木も鉱物もエネルギーもすべて神の生命（イノチ）、仏の生命（イノチ）の現れであると拝み、それらと共に生かさせて頂くという宗教心である。この宗教心にもとづく生活の実践こそ地球環境問題を解決する鍵であると考ええる。

生長の家は、昭和5年の立教以来、“天地の万物に感謝せよ”との教えにもとづき、全人類に万物を神の生命（イノチ）、仏の生命（イノチ）と拝む生き方をひろめてきた。

生長の家は、この宗教心を広く伝えると共に、現代的な意味での宗教生活の実践として環境問題に取り組み、あらゆるメディアと活動を通して地球環境保全に貢献し、未来に“美しい地球”を残さんとするものである。

発行 平成12（2000）年10月11日

改訂（行動指針） 平成13（2001）年12月5日

行動指針については次を参照

(<http://www.jp.seicho-no-ie.org/environment/about/index.html>)

(2) 目標と成果

成果として2001年から7年間で、本部、総本山、本部練成道場、別格本山及び練成道場（5事業所）並びに関係団体（2事業所）、加えて日本国内教化部（59事業所）の主な拠点の全てにおいてEMSの認証を取得したことが上げられる。また、この取り組みはブラジル、アメリカ、台湾の海外拠点に展開されている。次に、二酸化炭素（CO₂）の自主的な削減努力をしながら、2003年度からグリーン電力の購入を行い、2007年から「炭素ゼロ」運動に取り組み、2008年には4年分に相当するCO₂の排出権を取得し「炭素ゼロ」を実現し、維持している⁶⁶。「炭素ゼロ」運動の一環で、太陽光発電の導入を積極的に行い、各事業所や会員が導入した場合の助成を実施している。さらに、国際本部の「森の中のオフィス」が、2014年にCASBEE（建築環境総合性能評価システム）「既存」部門で、5段階で最高評価の環境効率Sランクを取得した⁶⁷。そして、2015年3月には、宗教法人として初のメガソーラー発電所（出力1.7メガワット）が、京都府城陽市で稼働を開始している⁶⁸。これらの成果について、ホームページ、ラジオ番組を含むあらゆるメディアを活用し、外部コミュニケーションに努めている。

(3) 今後の課題

環境保全の取り組み事例を検索すると、必ずといえるほど「生長の家」にたどり着く。環境保全に取り組む基本は、昭和5（1930）年の立教以来の“天地の万物に感謝せよ”との教えにもとづいているものと思われる。

環境保全の実績は、環境の専門企業や団体でも到達し得ないレベルに至っていると感じられる。稼働を開始したメガソーラーを含め、その時代のニーズ、政治を含めた社会のニーズに対応しながら、環境目標に向けて歩まれることを期待したい。

なお、教えの「万教帰一」で示されている通り、宗教界の環境保全のリーディング・オーガニゼーションとして宗教団体がめざす模範となり、次節で紹介する立正佼成会のEMSの認証取得で全面的なバックアップを行ったように、環境保全での宗教協力を続けられることを期待したい。さらに、環境保全のフロント・ランナーとして宗教界に留まらず、社会一般に対しても模範を示し続けていかれることを期待したい。

3.2 立正佼成会

立正佼成会の信仰姿勢は、私たち一人ひとりが心田を耕し、この世に生を受けたことの不思議、有り難さを知り、一人ひとりが「いま・ここ・わたし」を充実させて、毎日を楽しく生きる心を培う⁹⁸。教えは「すべての人が人間的に向上し、最終的には仏になることができる」と説く法華三部経を所依の經典としている。三部とは、無量義経、妙法蓮華経（法華経）、仏説観普賢菩薩行法経（観普賢経）をさしており、法華経に対して、無量義経を開経、観普賢経を結経と呼ぶこともある。法華三部経を中心とする仏教を通じて、いのちのあり方や人生の生き方を学んでいる⁹⁹。

庭野日敬開祖は「お釈迦さまへの直参」¹⁰⁰で、次のように説かれており、時代や社会のニーズに対応するEMSの取り組みにも通じるものと思われる。

お釈迦さまへの直参

なにごとくも伝統を守り、それを踏襲するのは大切なことですが、それは宗教の場合も同じです。ただ宗教は芸能などとは違い、生きている人間を実際に救わなくてはなりません。

人は、その時代、その環境の中で生活しています。その人たちを実際に救うには、その時代、その社会環境に応じた手段が必要です。これまで大事に守られてきた教えであっても、そのままでは、時の経過とともに時代の人びとを教化する力が弱くなっている場合もあります。

宗教の宗は、時代を超え、所を超えて不変なよりどころとなる根本の真理のことであり、教は、その真理をその時代、その人に応じて説くことです。この、時代に対応し、人に応じて説く大切さを忘れてしまって、いたずらに人びとが宗教から離れていくのを嘆くようなことがあってはなりません。

私が、お釈迦さまのみ心に直参する大切さをいつも強調しているのも、そこなのです。直参するとは直接教えを聞くことです。常に自分のあり方を法に照らしてみ、これでよいのかと問いかけ続けるのが、お釈迦さまのお心に直参することです。それによって教えが常に新しい教化力を保っていくのです。

EMSの取り組みは、2008年12月より教団本部周辺施設を中心に行われ、約1年の構築期間を経て2010年2月15日にISO14001の認証を取得した。取得に当たり、EMSの

先駆者である生長の家 ISO 推進支援部の全面的なバックアップの基、内部の職員（奉職者）で組織された EMS 事務局が中心となってシステム構築を実現している。

(1) 環境方針

立正佼成会の EMS の認証適用範囲は「仏教（釈尊が悟った真理・法）の布教」であり、本来の活動である布教そのものを適用範囲とし、登録範囲は14事業所、約500名の奉職者を対象としている。審査機関は英国に本部がある BSI グループジャパン株式会社（BSI-J）で、認定機関である日本の JAB（Japan Accreditation Board：日本適合性認定協会）と米国の ANAB（ANSI-ASQ National Accreditation Board）の相互認証を受けている。

環境方針の中で基本姿勢までは次の通りであり、布教の目的をめざす修行の中で環境保全にも取り組んでいるように感じ取れる。紹介を割愛した行動指針では、一般的なテーマに加えて、宗教協力の枠組みで合意された宣言等の率先垂範、「一食（いちじき）を捧げる運動」の推進が特徴的である。

立正佼成会環境方針

立正佼成会は、釈尊が悟った真理・法にもとづいて、『生かされ、生きるチカラ。』をテーマに平和な世界をめざしています。

地球温暖化をはじめとする環境問題は、今や多様な生物と人類の存続を脅かし、未来に深刻な影響を及ぼすものとなっております。

このような状況の原因は、私たち自身にあると内省し、人と自然が調和を取り戻す契機となるよう、環境への負担が少ない持続可能な社会の実現に取り組みます。

基本姿勢

■いのちの尊重

人間のいのちも、山川草木といった地上に存在するすべてのいのちも「永遠のいのち」の一つの現れであると自覚し、その尊いすべてのいのちを敬い、感謝する心を育みます。

■共生の実現

人は本来、皆一つの乗物の同乗者——その自覚に立ち、共に支え合う世界の実現に取り組みます。

■簡素なライフスタイル

日常生活の中で、「少欲知足」の心を養い、簡素なライフスタイルをめざします。

2009年6月2日

行動指針については次を参照 (<http://www.kosei-kai.or.jp/environment/policy/>)

立正佼成会は宗教協力を積極的に行っており、世界宗教者平和会議、新宗連などとも連携し、環境問題にも取り組んでいる。そして、2008年には「平和のために提言する世界宗教者会議～G8北海道・洞爺湖サミットに向けて～」に参加した。同会議では、テーマの「共有される安全保障」、サブテーマの「環境・気候変動」「ミレニアム開発目標」「核非武装」「暴力的紛争とテロリズム」を含む提言書を採択。内容が読み上げられたあと、日本政府を代表して会議に臨席した内閣官房副長官に手渡された⁹²。

また、「一食（いちじき）を捧げる運動」⁹³では、「いつでも、どこでも、だれにでも、いつまでも」実践できる菩薩行として、月のうち何日か食事を抜き、その食事代を献

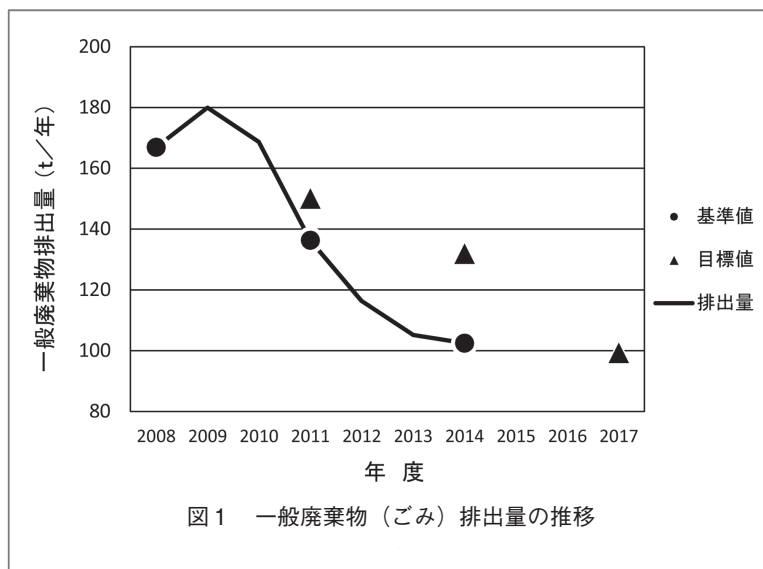
金して世界中の人びとへの支援に役立てるもので、今年で40年の歴史がある。この期間で寄せられた浄財の拠出総額が約134億円で、約80の国や地域でさまざまな支援に役立てられ、その中に環境保全の取り組みも含まれている。

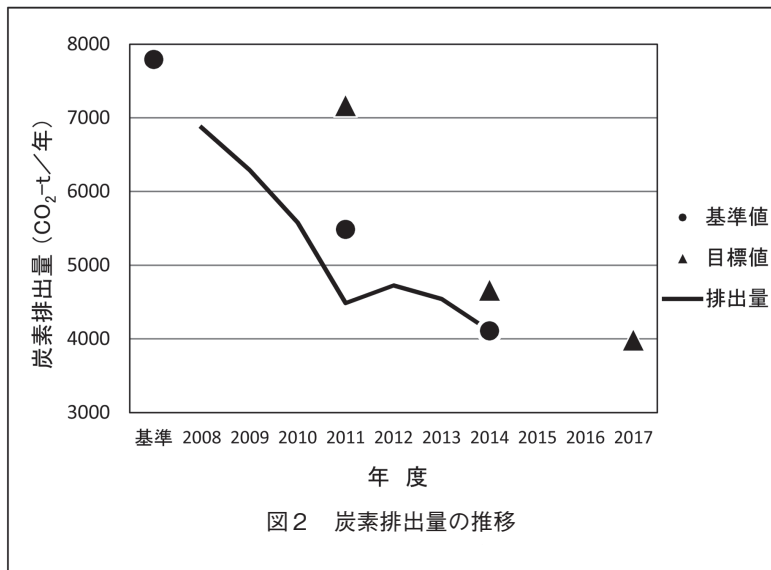
(2) 目標と成果

立正佼成会のEMSの取り組みでは、3年間の目標を管理するための中期実施計画書を作り実践している。第一期では、KGDI（K：紙の削減、G：ごみの減量、D：電力の節減〔節電〕、I：「一食を捧げる運動」の実践）を中心テーマとして取り組んだ。また、第二期では、ごみの減量、電力の節減、「一食を捧げる運動」に加え、「プラスの環境側面」の取り組み件数の増加を目標に活動が行われた。

紙の削減では、初年度に使用する紙（コピー紙に限定）の数量の把握を行い、年間192万枚の使用実績を確認した。目標として2年間で実績の20%削減を目指したものの14%削減で、3年目でも当初実績の15%削減の164万枚の使用に留まり、目標達成に至らなかった。その要因として、全国238教会への布教を紙ベースで行っていることがあり、紙の削減では、布教活動の方法の対策を検討する必要性が見えてきた。そのために、検討の期間中は、引き続き紙の使用量をカウントすることとした。

ごみの減量、電力の節減では成果が上がっている。ごみの減量では図1の通り、2008年度の実績166.9tを基準とし、3年間の減量目標を立てて減量を実践した。主な取り組みは、3Rの推進で、ダイレクトメールの受け取り拒否、紙の分別リサイクル、生ごみの発酵処理であり、2014年度までに39%削減し102.5tの排出となった。今後は維持管理項目として、2014年度実績を基準として毎年1%の減量をめざす。





電力の節減では図2の通り、2005～2007年度の実績7791t（CO₂排出量換算）を基準として節減を実践した。主な取り組みは、冷暖房温度の設定と運転管理の徹底、事務所の消灯や待機電力カット、夏冬の休館日の設定であった。この間で、東日本大震災が発生したことによる施設の耐震性の見直しでの使用休止も含めて、2014年度までに48%節減し4089tの排出となった。今後も引き続き節減を行い、2014年度実績を基準として毎年1%の節減をめざす。

(3) 今後の課題

KGDIについて、EMS活動の6年間である程度の成果があったものと思われる。ただし、紙の削減では、紙を中心とした布教活動の対策が残っていると思われる。

2015年からは、自行から化他へ成長するための第三期中期計画がスタートした。この中期計画の目標の一つに「部署のチャレンジ項目」の取り組み件数の増加が入っている。立正校成会の登録範囲の14事業所には、本部周辺施設の他に自然が豊富な青梅練成道場や生誕地道場も含まれている。これらの施設は、児童への環境教育の場、家族や周辺住民の憩いの場としての活用の可能性がある。そして、青梅練成道場には330ha（100万坪）の山林があり、首都圏に残された手入れの行き届いた山林として、多様な生物が住み多くの人たちから親しまれている⁵⁴。手入れが行き届いている山林とは、二酸化炭素などの温室効果ガスの吸収を効率的に行い、そのまま知らず知らずのうちにカーボン・オフセットされていることであり、この仕組みをEMS活動に組み入れることも考えられる。

また、登録範囲の中に校成霊園（墓地）も入っており、「永代供養墓の中心となる納

骨堂と供養の場」として2014年4月に聖霊殿と光明陵が新築され、聖霊殿では最長で故人の三十三回忌まで遺骨を安置できる。その後、聖霊殿での安置期間を終えた遺骨を光明陵（合祀〔ごうし〕墓）に納める⁶⁵。この永代供養とEMSの関連を含め、新しい供養の在り方など時代に即した取り組みに期待したい。

その他に、数千人が参拝できる大ホールとしての機能を備えた「大聖堂」、宗教関係の図書や文書を集めた「佼成図書館」、博物館的な展示施設の「開祖記念館」を内部に設置している「法輪閣」、専門学校の「芳澗女学院情報国際専門学校」、宿泊施設の「第二団参会館」、東日本大震災後にホールの天井が「震災時に崩落する危険がある」とされ、ホールのみ使用を中止し改修や建て直しを断念した「吹奏楽の殿堂」といわれた「普門館」⁶⁶の今後の対応など、多様な種類の施設が登録範囲に含まれている。これらの施設についての見方や捉え方を少し変えることにより、EMSの取り組みを通して、教えにある「毎日を楽しく生きる心を培う」可能性が大きく広がると思われる。

天台宗には「一験を得る」⁶⁷という教えがある。伝教大師は『顕戒論』で「最下鈍の者も12年を経れば必ず一験を得る」と説かれた。験とは仏道修行によって現われた効験のことで、誰でも12年間一つのことをやり通せば、必ず立派な結果を生む行いができる人になるという意味である。立正佼成会のEMS活動も6年を経過し、引き続き目標に向けた活動が進められている。その活動が「一験を得る」まで続けられ、他に良い影響を与えられるようになることを期待したい。

なお、EMSとの直接の関連がないものの、東宝ビル管理の品質マネジメントシステム（QMS:Quality Management System）ISO9001の登録範囲である「ビル総合管理事業における清掃事業の提供」の関連事業所として、立正佼成会大阪普門館が活動範囲に登録されており⁶⁸、快適性の高い清掃サービスの提供を受けている。

4. まとめ

以上、宗教団体の環境保全の取り組みの紹介を行ったが、各団体が取り組んでいる多様で独特な活動を改めて確認することが出来た。

ここで、環境保全の取り組みにおいて、宗教団体への期待を三つほど提示したい。これらは既に実践されていることであるが、改めて気づいていただくためにあえて述べる。一つ目は地球上で限りがある食料や資源を、一人ひとりが大切に使うように導くことである。二つ目は宗教団体が協力して、住民、企業や政府に対し環境保全に積極的に取り組むように、自らの実践を踏まえて提言し導くことである。三つ目は、宗教団体が実践している環境保全の取り組みについて、あらゆるメディアを利用して外部に発信することである。

最後に、多くの宗教団体では過去・現在・未来の三世を説いていると思われるが、

未来の世代からお借りしているグリーンとブルーの美しい地球を、現在の人びとが維持し続け、次世代に良い形で引き継ぐことができるように願っている。

付記

EMSの取り組み事例を紹介するに当たり、「生長の家」山岡睦治 国際本部広報・クロスメディア部部长及び小関隆史 同次長、「立正佼成会」橋本雅史 EMS事務局長（総務局時務部時務グループ次長）及び奥山知世 同スタッフには、EMSに関係する情報提供並びに掲載内容の確認をしていただきました。ここに記して厚く感謝を申し上げます。

参考文献等（参考文献、団体等ホームページ^(注1)、団体等刊行資料）

- (1) 町田勝「21世紀は環境の世紀」人間と科学 第8号別冊No.1 2000年 pp.54-56
- (2) 町田勝「地球環境問題の対策に日本の経験と技術が活用されるために」
CANDANA No.238 2009年 pp.2-4
- (3) 濱田隆士『地球環境科学』放送大学教育振興会 2002年 pp.15-19
- (4) 日宗連 http://www.jaoro.or.jp/about_us/org
- (5) 神社本庁 <http://www.jinjahoncho.or.jp/izanai/>
- (6) 富山県神社庁 <http://toyama-jinjacho.sakura.ne.jp/>
- (7) 鹿児島県神社庁
<http://www.kagojinjacho.or.jp/search/airaisa/aira/post-276.html>
- (8) 教派連 <http://www.kyoharen.net/>（2015年1月23日現在）
- (9) 出雲大社教 <http://www.izumooyashiro.or.jp/tantyo.html>
- (10) 大本 <http://www.oomoto.or.jp/japanese/katsudo/index.html>
- (11) 大本 http://www.oomoto.or.jp/japanese/katsudo/food_agriculture.html
- (12) 扶桑教 <http://www.fusokyo.org/fujisanshinkou.html>
- (13) 日本聖公会 <http://www.nskk.org/province/seikoukai.html>
- (14) 浜田山キリスト教会 <http://www.jesus.or.jp/~hamadayama/homu.html>
- (15) 全日本仏教会 <http://www.jaoro.or.jp/cooperate/Buddha>
- (16) 天台宗「一隅を照らす運動」<http://ichigu.net/digest/text.html>
- (17) 天台宗「MOTTAINAI」<http://ichigu.net/pillar/symbiosis01.html>
- (18) 高野山 <http://www.koyasan.or.jp/forest/rinen/index.html>（2月5日現在）
- (19) 浄土真宗本願寺派 <http://www.hongwanji.or.jp/project/>
- (20) 曹洞宗 <http://www.sotozen-net.or.jp/activity/ecology>
- (21) 日蓮宗「てらこや活動」
<http://www.nichiren.or.jp/terakoya/report/20110525-11/>

- (22) 日蓮宗「あんのん基金」 <http://www.nichiren.or.jp/annon/>
- (23) 新宗連 <http://www.shinshuren.or.jp/page.php?id=164>
- (24) 廣橋隆「電力ダイエット運動」資源環境対策 Vol.42 No.11 2006年 pp.87-90
- (25) 真生会 <http://shinseikai-world.or.jp/about>
- (26) 妙道会教団 <http://www.myodo.or.jp/peace/index.html>
- (27) 立正佼成会 <http://www.kosei-kai.or.jp/environment/>
- (28) 「全宗教法人信者数ランキング」週刊ダイヤモンド 2009年9月12日号
- (29) 真如苑「青梅の杜」 <https://www.shinnyo-en.or.jp/activities/>
- (30) 真如苑「子供カエル教室」 <https://www.shimz.co.jp/csr/csr100/001.html>
- (31) 神慈秀明会 <http://www.shumei.or.jp/art2.html#>
- (32) NPO 法人秀明自然農法ネットワーク <http://www.snn.or.jp/>
- (33) 崇教真光 <http://www.sukyomahikari.or.jp/activity/index.html>
- (34) 生長の家 <http://www.jp.seicho-no-ie.org/environment/iso/index.html>
- (35) 世界救世教いつのめ教団 <http://www.izunome.jp/action/envi/>
- (36) 株式会社 EM 研究所 <http://emlabo.co.jp/em/index.php>
- (37) 創価学会 <http://www.sokanet.jp/hbk/heiwa.html#no03>
- (38) 天理教「ひのきしん」 http://fukyo.tenrikyo.or.jp/h-sc/?page_id=379
- (39) 天理教「緑化ひのきしん」 http://fukyo.tenrikyo.or.jp/h-sc/?page_id=154
- (40) 中山身語正宗 <http://www.nakayamashingoshoshu.com/syakai/page01.htm>
- (41) 霊友会 <http://reiyukai.jp/history>
- (42) BL-QE http://bl.e47.jp/BL_ISOManager/ISO14001.aspx?I=ISO14001&R=E036
- (43) JAB <http://www.jab.or.jp/system/iso/search/detail/org/126195/>
- (44) JET http://www.jet.or.jp/iso_search/iso14001/index.html
- 検索（認証番号：E09-610、組織名：宗教法人霊友会）
- (45) 生長の家「基本的な教え」
<http://www.jp.seicho-no-ie.org/about/doctrine.html>
- (46) 生長の家「炭素ゼロ運動」
http://www.jp.seicho-no-ie.org/environment/carbon_neutral/
- (47) CASBEE http://www.ibec.or.jp/CASBEE/accredited_pdf/HPCAS-14-00021-1.pdf
- (48) 生長の家「宗教法人として初のメガソーラー発電所が稼働」
http://www.jp.seicho-no-ie.org/news/sni_news_20150406.html
- (49) 立正佼成会「信仰姿勢」 <http://www.kosei-kai.or.jp/020shinko/0201/>
- (50) 立正佼成会「教え」 <http://www.kosei-kai.or.jp/020shinko/0202/>
- (51) 庭野日敬『開祖随感5』佼成出版 2000年 pp.152-153
- (52) 立正佼成会 http://www.kosei-kai.or.jp/news/2008/07/post_1142.html

- (53) 「特集一食を捧げる運動40周年」やくしん 第53巻 第4号 2015年 pp.9-23
- (54) 立正佼成会「青梅練成道場」<http://www.kosei-kai.or.jp/040honbu/0409/>
- (55) 佼成霊園 http://www.kosei-kai.or.jp/news/2014/04/post_2920.html
- (56) 「普門館 記憶の家に」『朝日新聞』2014年1月15日 p.24
- (57) 山田恵諦『道心は国の宝』佼成出版 1987年 pp.131-134
- (58) JAB <http://www.jab.or.jp/system/iso/search/detail/org/78287/>

(注1) 参考文献等のホームページのアドレスについて、(8)教派連が2015年1月23日現在、(18)高野山が2015年2月5日現在、それ以外は全て2015年6月28日現在を示す。